

平成 21 年 9 月 12 日 (土)  
15 : 00 ~ 16 : 20  
富山県民会館 302 号室

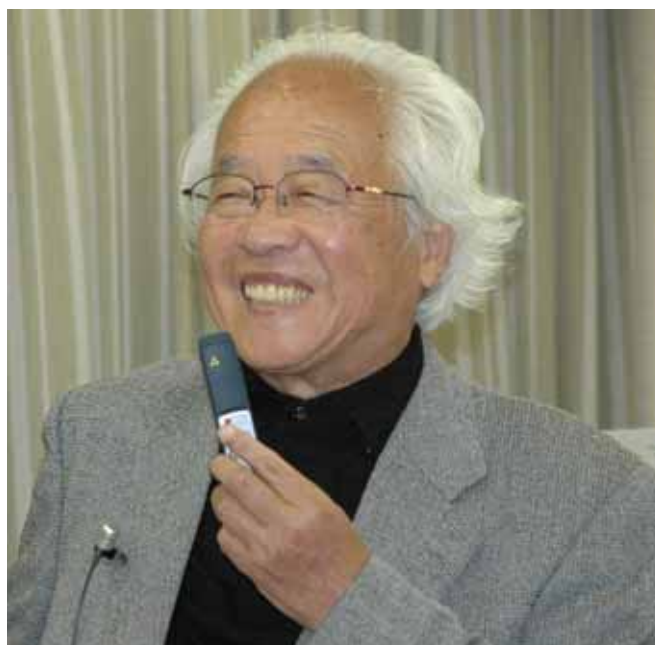
## 第 1 回 2 限目

# 台湾原住民族と日本文化

講師 高岡法科大学  
法学部長 教授  
千々岩 力 氏

## 1. はじめに

今日は、環日本海地域について何か話をといわれて、うっかり「原住民の話ならするぞ」と言ってしまったわけだが、この、環日本海地域のポスターには台湾もちゃんと入っていて安心した。台湾のことをよくご存じの同年配の方もいらっしゃると思うが、台湾原住民族のことはあまりお聞きになっていらっしゃらないと思うので、そのさまざまな風習などを述べてみたい。日本文化と比べてお聞きいただければ幸いである。



## 2. 台湾と台湾原住民族

17 世紀、「国性爺合戦」の鄭成功が、明をバックにして清を攻めるという形で台湾に行き、台南を占領した。台南では当時、オランダが支配し築城していた。今は赤嵌楼（せきかんろう）といわれているが、その城を取って一つの政府を作った。当時、台湾に住んでいたのは、すべてが台湾原住民であり、現在の台南地域を彼らは「タイワン」と呼んでいた。オランダ人が台南に行き、「ここはどこだ」と言うと、「タイワンだ」と言ったことから、その後今の台湾全体を「タイワン」と呼ぶこととなった。今は「台湾」という字になっているが、これは本当は現地の言葉なのである。

私は、台北生まれの台南育ちで、毎年のように台湾に行っているが、台北と台南では、台南の方が快適だ。台湾の京都・奈良という言い方をするが、古い都だということが感覚的に分かる。

1895(明治 28)年から 1945(昭和 20)年まで、台湾は日本の植民地だった。日清戦争の結果、台湾が日本の統治下に置かれることになり、日本は初めての植民地であったことから、全力を挙げてそこを良くしようとした。台湾に旅行されると、大半の人が非常に親日的な反応をしてくれる。その根元は、台湾の基本的なものを日本が全部造ったことにある。記録によると日本の国の予算よりもたくさん金を使って造ったということ、台湾の古い人たちはよく知っている。それが親日の基本にあると思う。

僕らがいたころは、日本人のことを内地人と言っていて、内地というところとちょっとした優越感があった。台湾の人口は今 2300 万人弱だが、戦争が終わった 1945(昭和 20)年には 620 万人だった。当時、日本人は兵隊も含めて 50 万人ぐらいいたと思う。その後、戦争に負けて中国から兵隊を中心にたくさんの人々が来た。その大陸人たちを、台湾人と分けて外省人といった。本省というのは台湾省のことである。

戦争が終わり、1946(昭和 21)年 3 月から 7 月ごろまでの間に、みんな日本に帰って行ったが、私は親の関係で残されて、1947(昭和 22)年の 5 月までいた。その年の 2 月 28 日に二・二八事件が起こり、日本人はすぐ帰れといわれ、全財産を投げ打ってリュックサック一つで帰ってきたのが 5 月のことで、そのときに入れ替わって入ってきたのが外省人だった。今現在は本省人が 85%、外省人が 13.5%ぐらいで、そのほかに 1.5~2%、40 万人ほどの原住民がいる。

原住民族は現在 14 民族あって、それは言語を中心に分類するといわれている。台湾の真ん中に中央山脈があり、3000m以上の山が 120 近くある。その西南部を中心に、300~350 年ぐらい前に、台湾に行ったら何とか食べると、わっと人が押し寄せてきた。西海岸は平地が多いので、そこで男は女を求め、原住民の女性と結婚した。そのため、平地に住んでいた原住民の文化が消えていくと同時に、そこに六つか七つの種族がいたが、その人たちも同化されていった。そんなことはとんでもないと反抗する人々が山に押し上げられていったという経過があるのだが、もともとは全部が原住民だったところであり、今は約 40 万人である。

しかし、この 40 万人という数字もなかなか難しく、例えばサイシャット族は現在 7800 人ぐらいいるが、その頭目は「長男が上海に出稼ぎに行って、上海美人を連れてきた。二人の女の子ができたが、それはおれの孫だからサイシャット族だ」と言う。実は日本が統治するときに、悉皆調査で全部調べ上げて戸籍を作ったのだが、その戸籍で種族の分類をしたのだ。現在でもこの戸籍が原本として生きている。要するに、本人たちが知らぬ間に突然何族といわれたということもいっぱいあって、山のあちらとこちらで反目していた人同士が日本人が来て親しくなり、知らぬ間におまえとおれは同じタイヤル族だとなったということもあるわけである。

14 族の言葉は、似たものも少しあるが、全部違う。また、台湾語は福佬語といい、客家語を使うのも約 15%いる。客家語と福佬語は全く通じない。さらに、台湾は純粹の北京語

を国語にしており、台湾語と北京語も全く通じない。そのほか、広東語もちょっと入っている。客家語を使う人々には鄧小平など偉い人が多く出ている。客家語以外を話すことはお互い同士禁じている。私の大学の先輩で台湾の弁護士がいるが、彼は法廷では北京語を使い、買い物では台湾語で話して、家では客家語をしゃべる。そのほか彼は日本語も上手なのだが、外ではなるべく日本語を使う。そういう区別をしながら台湾の人たちは生活をしている。なお、客家語を話すといっても、彼らは実は漢民族だ。

### 3. 蕃人、高砂族、そして山地同胞と平地同胞

蕃人とか生蕃という言葉は日本人が付けたと思っている人もいるが、そうではなく、中国の漢民族が、自分たちの文化になじんでいない、草がぼうぼうと生えているところであらうろしているという意味で蕃人と言ったのだ。熟蕃というのは、その当時の文化になじんでいる、文化と親しくしているという意味で、どちらも差別語である。

アイヌやほかの民族をいう場合、「先住民」というが、台湾では長い間議論した結果、自分たちはもともといるのだ、自分たちが本当の主だということで「原」という字を書くことに決めた。「原住民身分法」という法律を作り、憲法の条文も改正している。

高砂族という名前で覚えていらっしゃる方もおられるだろう。昭和天皇がまだ摂政だった 1923(大正 12)年に台湾を一周された時、上陸の歓迎式典で民族衣装を着て歌や踊りが披露された。それを見ながら昭和天皇が、「今さら蕃人というのはどうか」とつぶやいたのが発端で、ずっと後だが 1935(昭和 10)年以降は、公文書上で高砂族という名前に変えたのだ。高砂のいわれはさまざまで、沖縄の琉球語で台湾のことをタカサング(山が高い)という。また、豊臣秀吉が、受取人もいないのに、おまえはおれの配下だという手紙を出した。そこに高山(タカサゴ)とふりがなをふってあったそうだ。また、スペインが一時支配していたが、スペイン語にもタカサンという言葉がある。台湾の女性研究者が論文で、高砂族といういい方は決して日本化するための表現ではない、「自分たち台湾族」という意味だという結論を出している。

中華民国復帰後から、高砂族という言葉はだんだん消えていって山地同胞になり、1956(昭和 31)年には山胞となったが、台湾の中央山脈の東には高度 200~300mの平地がある。そこはアミ族が一番多く、今は約 15 万人いる。その南の台東にはピューマ族がいる。彼らからすると「おれたちは平地だ」となるため、その後、山地同胞と平地同胞という用語に改めた。

## 4. 過去に遡及

### 4-1. 使用言語

過去に使われていた言語は、一括してオーストロネシア語族系に属する。これは南の諸島であるインド洋から南太平洋の辺りで、全部で約 700 語あるという。日本は植民地時代、

日本語を強制していた。台湾の原住民で、山の方にもともといたり、追いやられたりした民族は、それぞれの言葉を持っていて、お互いに通じないので日本語を話すようになった。だからどこの山に行っても日本語が通じる。彼らは日本語を学ぶことによって、ほかの種族の人とも付き合えるようになったのだ。実に、高地では日本語が共通語だったわけだ。

1945（昭和 20）年 2 月 28 日に起きた二・二八事件の背景は、台湾に大陸からたくさんの方が来て、兵隊を中心にやりたい放題をした。それに反発したというのが一番単純な理由だ。それを機に台湾語が禁止され、北京語一本ということになって、台湾の人たちは非常に不自由な生活を強いられるようになった。1987（昭和 62）年に戒厳令が解除された翌年、私が台湾へ行くと、人々は台湾語をどこでも使っていた。台湾語を一切しゃべるなどというのは、日本語以外しゃべるなどというのと全く同じことだったのだろう。

そして李登輝が出てきた。彼は本省人（台湾人）で、京都大学農学部で農業経済を学んだ。日本の軍隊は長男を大事にしたので、長男だった李登輝は、陸軍大尉だったが戦場へ行くことを免れた。いろいろ運の良い人だったが、その李登輝がいわゆる民主化を推進し、言葉も一切自由だと言った。それが台湾が明るく良くなっていくきっかけになった。

台湾は、日本の占領時代に線を引いて、ここから上は蕃界、ここから下は平地地として、蕃界に入るには許可が要った。蕃界は 44% で、その中での共通語がたまたま日本語になったのだった。アイヌというのは、人間という意味だそうだ。タイヤル族、セダツカ族、ツオウ族、タオ族は皆、人間という意味である。それがそれぞれの族の名前の由来だ。

3 年前、原住民族の語学検定試験が始まった。これは自分たちの文化を守ろうという世界的な運動の一つだが、14 語族が、試験を始めるとだんだん増えてきて、分類すると 32 ~ 33 語になった。今、一生懸命教科書を作っているところだ。

言葉というのは、男言葉とか女言葉とか、山の上の言葉とか、いろいろあって面白い。山に住んでいる男たちは、狩猟をするときは違う言葉を使う。普通の言葉を使っているとイノシシにばれるからというのだ。それから、タオ族は、男はトビウオを捕ることが一生の仕事だ。そこでは、男の名前の付く魚と、女の名前が付く魚がある。男が優先でいろいろな魚が食べられるが、女は「妊娠したらこれだ」とだんだん減っていく。しかし、年を取ると男と同じになり平等に食べられるようになる。言葉はだんだん平準化というか、混ぜてくるのだが、赤ん坊が使う言葉はずっと残るそうだ。そこから言語学者は研究するという。

14 族は言葉の違いで分類するが、これには考え方が二つある。主観説が、おれたちは仲間だ、おれたちの出身はここだという主観的なものであるのに対して、客観説は、言語や宗教、文化という客観的な事実を調べて分類する。日本が戸籍を作ったが、後でよく調べると、同じ民族でも宗教的な出身系統が違っていたりした。それまで一緒にしてしまうと、民族という意味が非常にあいまいになってくる。それで結局残るのが、言語学である。それが 30 語もあるというわけだ。

言葉については、第二次世界大戦でいわゆる高砂族の人たちが、それほどには強制的でなく、自分たちは日本人だといって義勇兵として出て行った。フィリピンに行き、マニラが総攻撃されたとき、山上に逃げたが話が通じて助かったという話もある。

#### 4-2. 風習

台湾の昔の風習で、首狩りというのがある。出草というが、草陰に隠れて、ぱっと飛び出して首を狩るという事実に一番合う表現だ。首狩りは成人した証拠で、首を狩れないようなやつは一人前ではないとされる。首を狩ると一つ刺青が入る。また、武勇、要は戦果を挙げる一つとして首を狩る。復讐もある。それから、宗教的な背景もある。「首を取った」と帰ってくると、蕃社（村）を挙げて歓迎し、その晩はどんちゃん騒ぎをする。そのときには、首をきれいに洗ってお化粧をする。頭目の家の首棚には 30～50 も並んでいる。それで極楽に行けるというのだ。優秀な狩人だという意味も含めている。こういう首狩りの風習は、日本時代になり、1930（昭和 5）年の霧社事件の頃を最後に行われていない。

刺青は、成人したときに顔に全面的に入れるのが普通だが、部族によっていろいろ決まりがある。その刺青を見ると、どこに所属しているかが分かる。死んであの世に来たときにも、刺青を見れば種族、出身、出所が分かる。そのために刺青を入れるといわれている。

女の人の場合、織物ができるようになると一人前とされる。そして、やはり種族によって刺青の入る場所が違うが、それを見れば「あいつは一人前だ」「これは良い嫁になる」と分かる。また、刺青でどういう功績があるかも分かる。もう一つは、美観である。それは素晴らしいものだ。アイヌも刺青をする。沖縄は膝小僧にちょっと付ける。一つの目印のようなものだった。

首狩りや刺青は、今は残っていないが、民族種族によってそれぞれの意味があるわけで、それをおかしいという理由はない。

#### 4-3. 組織・婚姻・犯罪と刑罰

蕃社の統治者は、10～30 軒ごとに一つの山の中を統括していた。これが頭目である。世襲の頭目を擁するのはサイシャット、ブヌン、ツオウ、アミ、パイワン族だ。サイシャットは台北から 100 km ほど南の山間部に、ブヌンは中央山脈、ツオウは台南の近く、そしてアミ族は東海岸、パイワン族は高雄にいる。

パイワン族は男女関係なく長子相続で、貴族と平民がいる。頭目は土地を領有している。畑を作らせてくれと言われれば、それを許可して、その代わりに税金を取る。これが蕃租農租徴収権である。そのような一つの権力を頭目が持っていて、これが貴族というわけだ。貴族という言葉はわれわれが作った制度上の言葉だが、決して大きくはない集団の中に貴族と平民があるというのも面白いといえば面白い。

タイヤル族の場合は平等の組織で、みんなで推薦して頭目を決める。頭目は外交の代表

になったり、中を治めたり、処罰のときなどの司祭や仲裁役になる。

婚姻は、単婚で、適齢婚である。女の子は胸が大きくなることや刺青で、男は首狩りの経験などで適齢という判断をする。近親婚はいけない。仇敵とは結婚しない。結婚するときに何か持っていく有償婚もある。結婚式を挙げるのは有式婚という。一軒の家には 3 世代の家族がいるが、結婚式の夜は夫婦がちゃんと寝ているかを確認する。それは決して秘密でなく、子孫を作るための大事な仕事なのである。

犯罪の解決方法には、頭目や有力者が仲裁をする方法と、神判がある。神判は、首狩り審と狩猟審と角力審がある。タイヤル族では、自分の無実を証明するために首を狩る。神様が正しい者に首を狩らせるのだということで、失敗したら有罪となる。狩猟審はシカやイノシシを捕ってくれば無実となり、角力審は相手を組み伏せた者が正しい者となる。

## 5. 現在の様子

陳水扁前総統は今、刑事裁判の被告になったりしているが、彼は李登輝の弟子の一人として民主化を推進した。その中で、原住民委員会を作り、その委員長を大臣と同じ格付にしている。原住民族の独自性を尊重する政治が行き届いていると思う。

高雄の右端に蘭嶼(らんしょ)、日本時代は紅頭嶼(こうとうしょ)と呼んでいたところがある。その島の角に、海に向かってどんと紅い顔の大岩があって私にはサルに見えたが、それで紅頭という名前が付いた。ここにタオ族(旧ヤミ族)がいて、現在は約 3500 人である。ウオーレス線ではフィリピン圏に入る。絶海の孤島だから文化にあまり洗われていない。そのため、非常に研究対象が残っていて、文化人類学や建築学の研究対象の宝庫になっている。そこにだけいるコウトウキシダアゲハ蝶は、アゲハの一番大きな種類で、色が七変化する天然記念物だ。

ここでは、独特な伝統的模様の船を造り、手でこいで夜の海に行き、たいまつを灯して、タモでトビウオをぱっと捕まえる。トビウオ漁は 3 月から 7 月の終わりまでやる。取ったものは干して、それを 10 月まで食べる。残ったものは必ず捨てる。私はうまい魚が食べられると思って楽しみにして行ったら、これは自分たちのための漁だ、人にやったら罰が当たると言われて一切食べられなかった。ここでは名前の付け方に特徴がある。例えば、花子さんと太郎さんが結婚し、子供ができたなら子供が太郎と名前が変わり、花子さんと太郎さんもその両親も名前が変わる。そして、たまたま子供が早く亡くなれば、両親の名前は全部元に戻る。だからさっぱり分からない。葬式も蘭嶼の特徴である。共同墓地があって、人が死ぬのは悪い悪魔がとりつくのだということで、誰かが死ぬと急いで背中に背負い、槍を持って共同墓地まで走っていき、そこに放り込んで悪魔を退治する。